毛筆と仲良くなるために

●香川大学　小西憲一

大部分の小学三年生にとって、初めて触れる毛筆という未知の筆記用具、これにいかにスムーズに抵抗感なくなじませていくか、小学校書写における重要な節目であることは言うまでもない。このときの印象が、書写に対する好悪、ひいては自分の文字に対する好悪にまで影響する可能性がある。

毛筆導入にあたっては、一度に多くの情報を伝えたくなるところである。その結果児童の混乱を呼び起こすことがあるのではないだろうか。三省堂の新しい書写教科書の毛筆導入部分では、最も大事なポイントを標語のように大きく示してある。

「ほ先の向きは十時半」

毛筆においては、穂先がどこを通るかによって、点画が形作られていく。穂先に対する感覚を養うのが重要である。ほとんどすべての点画が、「十時半」の角度で入筆されていることを意識させたい。指導者の手を使った空書によって、「ほ先の向きはこの方向」などとアレンジしてもよいだろう。

以下、基本点画の登場ごとに、朱墨で穂先の通る位置を示し、ポイントを短い言葉で大きく掲げている。常にここに立ち返ることで、基本を確認したい。

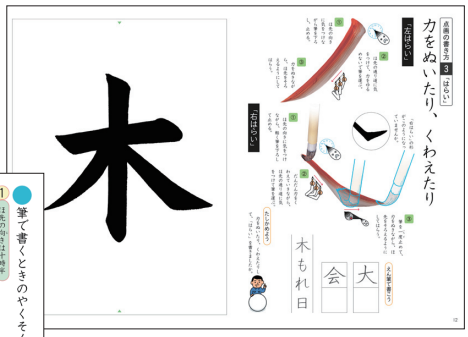
「力をぬいたり、くわえたり」

毛筆には穂の弾力を利用して強弱、つまりは線の太細を表現できるという特色がある。それが最も顕著に現れるのが、「はらい」と「はね」である。児童に見られる運筆の問題点に、勢いにまかせて荒く動かすために終筆がまとまらないということがあげられる。「はらい」と「はね」は、ゆっくりと力を加えたりぬいたりして、最後に穂先を一点に集めるという感覚を伝えたい。

身の回りの筆文字

実際筆を使って文字を書くことで、身の回りの筆文字に関心が及ぶようになる。看板や広告の筆文字を探す、歴史上の人物の書や寄席文字などにふれる、教室の掲示物を筆で書くなど、方法はいくらでもあるだろう。

児童が筆という筆記用具に興味をもち、書写の時間が待ち遠しいと思うような、導入のあり方をさまざまに工夫していきたい。



3年「点画の書き方③『はらい』」

3年「筆で書くときのやくそく」

こにし　けんいち　香川大学教育学部教授。教員養成課程にあって，書写書道の楽しさを伝えられる先生が，たくさん育ってくれることを願っています。